

## 秀吉の九州征伐により豊後一国を与えられた大友氏のその後

### 大友吉統の除国

国内統一をおえた秀吉は、天正十九年（一五九一）秋に朝鮮征伐をくわだて、諸大名に兵船や軍兵の用意を命じた。命を受けた大友吉統は、永富鎮並や古莊喜右衛門尉らに命じて兵船の準備をさせ、中島統之らをやって肥前名護屋城構築を分担させた。その翌年が文禄元年（一五九二）で、秀吉は一五万八〇〇〇人の大軍を九番に部署して渡海させた。大友吉統は三番手として中津の黒田長政の指揮下にはいり、同年三月六〇〇〇人の甲兵をひきいて出陣した。志賀道輝らが府内にいて吉統の妻子をまもり、吉統の子義述は、基地となった大分郡家島（現大分市鶴崎）の留守番にあたった。吉統は四月名護屋を出帆し、一五日で半島に上陸した。

日本軍は破竹の進撃をつづけたが、戦線が伸びるにしたがい兵糧がつづかなくなった。そうなる朝のゲリラ隊がおこり、日本軍の後方攪乱をはじめ、長期戦の様相をおびるようになり、わが軍の戦意がおとろえてきた。

ようやく越冬して文禄二年の正月をむかえたとき、明の將軍李如松が二〇万の大軍をひきいて朝鮮をたすけ、平壤を守備していた小西行長の陣におしよせたのである。

行長は急使をはせて後陣の大友・黒田・小早川（秀包）に連絡し、救援をもとめた。黒田・小早川は兵力が少ないのですすまず、吉統は黒田の陣に行き軍議をおこなっていた。留守中の大友本陣では、吉弘統幸のように、救援を主張するものもあつたが、多くは行長がすでに戦死しているだろうとして退却を急ぎ、隊を乱して黒田陣に退いたという。この事情のたしかなことはわからないが、敗走した小西行長がおこつてこれを秀吉にざん告したのである。

秀吉は烈火のごとくいがり、吉統の死一等を減じ、国をうばうとともに、身柄は毛利輝元にあずけて幽閉した。

このときの使者が福原直高と熊谷直陳の二人であつた。

「甫庵太閤記」によると、高麗陣衆に布告した吉統除国の軍令には、

一先手の城々が難儀に及ぶ際、救援のためにつなぎの城々をこしらえおき、人数を入れてあるのは万々承知のはずのところ、小西の急難が百死一生の事態におちいりながら救援せず、しかも、平壤の様子を聞き合わせもせず逃げ崩れたことは、前代未聞ひきよの振舞である。

一秀吉は若年の昔から軍の道にたずさわっているが、大明勢との戦いであるから、特別に日本のため一段と粉骨をはげむべきところ、武名にも恥じず、忠義の心もなかつたこと、武士たるものとして言語道断のことである。今後の見せしめのため一命を打ち果たすべきところ、頼朝以来の由緒ある家柄であるから、死罪を宥め、身柄を毛利にあずける。と記されている。

吉統は母の性格を受けついだものか、神経質で気が小さく、どもるくせがあつたらしい。

天正一四、五年の島津軍の豊後侵入で、戸次川の戦いに大敗したときも、秀吉からこんこんと持久戦の態勢をとって翌年の出陣を待つよう指示されたにもかかわらず、軽率に兵をだして大敗北をこうむった。それだけでなく、本城である高崎城（大分市）にもふみとどまらず、宇佐郡の龍王城までも遁走して、秀吉の激怒をかった。九州征伐のときの秀吉の部将の報告にも、吉統は家臣の統率が小十分で、将たるの器でないことが内報されている、という。秀吉はこのときにも吉統の除国を考えていたが、鎌倉時代以来の由緒によって豊後一国はこのこしたのである。こうしたたび重なる振舞が、ついに大友氏を滅ぼし、豊後武士の武名を長く傷つけてしまったのである。

吉統は朝鮮から送還され、人もあろうに長年の宿敵毛利輝元にあずけられ、山口の本国寺に幽閉された。かれは人道して宗巖と改め、中庵と号した。一年ばかり山口にいて、文禄三年九月には水戸（茨城県）の佐竹義宜にうつされ、嫡子能乗は江戸の徳川家康にあずけられた。山口では豊後に近く、旧臣との連絡がつきやすく、不都合であると考えられたからであろう。このとき家臣の多くは途中まで見送り、なかには水戸まで送りどけたものもある。吉統が山口に幽閉されてのち、その女が始祖能直以来の重代相伝の文書を、庶家の筑前立花氏にあずけたという。立花氏では、吉弘氏からはいって鑑連（道雪）のあとをついだ宗茂が朝鮮役で勇名をはせ、大友家で唯一の大名として江戸時代にのこる。大友文書が、今日柳河の立花家に伝存するのはこのためである。

## 石垣原の戦い

慶長三年（一五九八）に秀吉が死んだので、翌年になって大友吉統は許され、江戸牛込にいた嫡子義乗の家に一時身をよせた。それから京都にのぼり、本能寺の一室を借りて側室伊藤氏と男児正照とともに住んだ。

秀吉死後の大坂では、徳川家康派と石田三成派との対立が激しくなり、戦争の機運が近づいていた。吉統は、長子能乗が徳川家康に預けられて秀忠につかえた関係から東軍に志し、文禄の役でともに戦った中津の黒田氏と密約し、機をみて豊後にはいる考えであった。なお竹田城主の中川秀成につかえた旧臣田原親賢（紹忍）や宗像鎮統らに命じて中川氏や肥後の加西清正と盟約をむすばせ、京都の本能寺で時のいたるのを待っていた。

当時大坂では石田・徳川両派の大名抱き込み運動が猛烈で、さかんに人質政策が強行されていた。どのような策略によったかはわからないが、本能寺から末子正照と側室が大坂方から拉致されたという。書物によっては前に頂けられていた毛利輝元から兵船と軍隊をあたえるとの条件で西軍に誘われたといい、また石田三成から秀頼の命として大坂城に呼びよせられたともある。

「大友家文書録」では吉統はいつわって輝元に応じたとするが、これは吉統の行動を弁護するためのもので、その後の行動からみてもそうしたことは考えられない。

同年九月吉統は安芸の大島にくだり、輝元から兵船と鉄砲隊一〇〇人をあたえられて出

帆した。その途中でこれまで庶家の立花宗茂の所に身を寄せていた旧臣吉弘統幸が、江戸の能乗につかえるために小倉から乗船して周防上関を通過するのに出会った。統幸は吉統が西軍につくことをきき、長子能乗が徳川氏につかえ、かつ黒田氏との密約があるうえに、天下の形勢からみても絶対不利であることを説いて諫めたが聞きいれられず、死を決して吉統に従った。

\* 兵をあたえたのは石田三成で、鉄砲若干と足軽一五〇人であったともある。吉統があてがわれた足軽隊は、豊後深江港に着いたとき大坂に逆戻りしてしまった（「キリシタン大名大友宗麟」）。それでも吉統は九月九日別府浦に上陸し、立石（別府市観海寺西北の南立石）に陣をしいた。ここから竹田の中川氏につかえた田原親賢・宗像鎮統らを召し、譜代の旧臣らが馳せ参じた。統幸はおくれて国東富来浦に着き、安岐・木付をへて本隊に合した。

当時本付城は東軍の細川忠興が領し、城代松井康之がまもっていた。松井は郡内の庄屋以下から人質をとり、反乱をおさえていた。大友旧臣らはまず人質奪回を要求したので、吉統は木付を攻めさせた。このとき中津の黒田孝高（如水）は国東に進軍し、西軍の富来城主笈家純と安岐城主熊谷直陳を攻めていたが、笈・熊谷ともに関ガ原出陣中で、安岐城代熊谷外記をくだし、松井の急報で木付城を救援した。人質を奪回して退却した大友軍を松井・黒田の軍が追尾し、先鋒松井は別府の実相寺山に陣をとった。

これをみて吉統は、立石から本隊を石垣原に出陣させた。吉弘統幸は死を決して主君に決別し、松井の陣に突進した。松井も実相寺山からくだって白兵を交えたが、決死の吉弘軍の攻撃にあって第一線は敗退した。しかし黒田孝高や高田（豊後高田市）の竹中重利の大軍が松井をたすけたので、衆寡敵せず統幸は戦死した。その他の大友軍の部将・雑兵も多く討たれ、吉統は自刃しようとして田原親賢に止められ、黒田孝高に降参した。孝高は許して大友軍を解散させ、吉統は中津から江戸に送られ、家康から出羽秋田の秋田実季に預けて幽閉された。同七年実季が常陸宍戸に移封されてこれに従い、同十年七月十九日吉統は四八歳で配所（一説に江戸牛込という）において没した（「大日本史料」第十二編の三）

この戦いで竹田の中川氏の客分となっていた田原親賢・宗像鎮統らは中川家の旗印を盗みだして大友軍に従ったので、黒田孝高は中川氏が大友軍に味方して徳川氏にそむいたと早合点し、これを家康に報告した。秀成は使者を遣わして陳弁したが誤解がとけず、家康は肥後の加藤清正に命じて中川氏を討たせた。清正は秀成謀反の虚実を正してのち兵をおこすべしと報じて宇土の小西行長攻略に向かい、秀成も宇土まで使者をやり人質を送って陳弁した。秀成はさらに誠意をあらわすため石田三成与党の臼杵太田一吉を討つことに決し、みずから出陣して臼杵城を攻めた。このとき田原親賢は、竹田領の大分郡今津留（大分市）の定詰で船奉行をしていた柴山諫兵衛重成につき、旗盗み取りの罪を謝し君前のとりなしを請うたが、諫兵衛は激怒して拒絶し敵方に追いやった。秀成は柴山らに臼杵進攻を命じたので、柴山は軍勢をひきいて小佐井村を焼き、佐賀関で太田勢と戦った。この佐

賀関の戦いで、田原親賢は鉄砲にあたって戦死した。大友氏の歴史をひもとくとき、親賢ほど悪評高い武将は他に例がない。宣教師の報告書や野史類の記述がどの程度信じるかどうか、今後の研究が必要であろう。

さて、中川勢は最後に臼杵城に対して猛攻を加えた。しかし、この海中の天険を攻めおとすことは容易にできなかった。そのうちに関ガ原の戦いで石田方の敗北の急報がとどき、太田一書も抗戦の不可なることを知り、夜陰に乗じて城を脱出し、船で伊予国にのがれ、のち高野山にはいった。そこで中川勢も囲みをとき、兵をまとめて凱旋した。

このときの戦いで、中川・太田両軍の戦死者が少なかったのは、両者が示しあわせて決戦をさけ、関ガ原の勝敗を待っていたと疑うものがいたらしい。家康もそうかと疑っていたが、のちに佐賀関の合戦で、中川平右衛門以下の名将が多く戦死したことを知り、その疑いもはれ、中川氏の無二の忠節を賞したという（「豊築乱記」）。

なおかつて府内六万石を没収された福原直高は、石田三成の佐和山城にいたが、関ガ原の役で大垣城をまもり、家康の部将水野勝成・津軽為信らの来攻を防いだ。しかしかれは関ガ原の敗戦をきいてのち開城し、護送されて伊勢国朝熊の石城山永松寺に幽閉され、のち切腹させられた、という。

以上 渡辺澄夫著 大分県の歴史 山川出版社 から抄録した。